
江戸風鈴っていいね

KAITO Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸風鈴っていいね

【ノート】

N19860

【作者名】

KAITO Y

【あらすじ】

夏の終わり、熱海かどこの縁側で。

蝸の声に包まれながら夏の黄昏れ時が通り過ぎていった。開け放たれた縁側と畳の間に腰掛け、風鈴の音を聞きながら前から押し寄せせる海風と後ろから体を冷やすクーラーの風を楽しむ。夕焼けに染まる海は赤く輝き、色付く西空の先にイカ釣り船の明かりがボーツと浮かんできた。手元に置いてあったコップの中で氷がカランと音を立てて崩れ落ちたのをキツカケに、私はやっと動く決心をして、重い腕を伸ばして足元の団扇を手を取った。美しい紅色の団扇。去年の夏に買ったものだ。それで少し扇ぐと香の香りが死に装束のまま直していない半纏の袖口から入り込み、まだ風呂上がりでほてりの冷めない体を撫でるように抜けてゆく。そしてしばらく海に落ちてゆく日を眺めていると、それがまだ沈みきる前に瞼が重くなってきた。このまま沈みゆく夕陽を今少し眺めていたかったが、私の体は意思に逆らい眠る事を求めているようだ。私はそれもよしとして、ゆっくりと縁側に横になった。最後に見えたのは染みのついた汚い天井だけだった。

何分、何時間経ったか分からない。気が付くと夕日は既に沈んで辺りは暗くなり、私を照らすのは虫のたかる白熱電球だけになっていった。寝すぎたかと反省しながら頭をもたげると海は真っ暗で何も見えなくなってしまうている。私は少し惜しい事をしたように思っ、どうせ家の者が帰ってきたら起こしてくれるのだからうから寝て忘れてしまおうと電気を消してまた仰向けになつて寝転んだ。

だがふと見上げると空には満天の星が広がり、それを追いかけてゆくと星の海は水平線まで続いていた。その中に輝く小さな月は遠い海面を銀色に照らしている。そのまるで絵画のような美しさに私は腹ばいに寝転がり、欠伸さえも忘れ、息を飲んで見入ってしまった。夕日が沈めば美しい景色も終わりだと思っただが、そうでもないようだ。これだから自然の移り変わりというものはおもしろいのかもし

れない。私は部屋の電気を小さくし、氷の溶けたコップに酒を注いで星空を見上げた。次は何が私を驚かせてくれるのだろうか。例えば何も来なくとも、気長に待ってみようと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1986o/>

江戸風鈴っていいね

2010年10月9日00時12分発行